

1 趣旨説明

鈴木 淳

○鈴木 みなさん、こんにちは。東京大学人文社会系研究科日本史学研究室の鈴木淳と申します。本日は東京大学ヒューマニティーズ主催のシンポジウム「本郷キャンパスの形成とそれを語る学術資産」にお集まりいただきありがとうございます。

このシンポジウムは、東京大学ヒューマニティーズセンターの企画研究「学術資産としての東京大学」の第三回研究会として行われます。ヒューマニティーズセンター（略称HMC）とは、昨年（2018年）7月に発足した本学の連携研究機構で、文系部局を横断した研究共創を目的とする組織です。このHMCには、株式会社LIXILグループ及び潮田洋一郎氏（同グループ取締役会長）の財政的な支援によるLIXIL潮田東アジア人文研究拠点が設置されており、そこでは企画研究が三本行われております。そのうちの一本が「学術資産としての東京大学」であり、私を研究代表として、本日登壇されます木下直之先生を含め数名の先生にご参画いただいております。

企画研究「学術資産としての東京大学」では、本学の「学術資産」について様々な分野の先生方からご意見を伺っております。本学では「学術資産」という言葉が近ごろ流行しておりますが、その反面「学術資産」という言葉の意味がわからなくなっています。そこで、東京大学が学術資産たる何を持っているのか、各人が何を学術資産と考えているのかということについて「学術資産」という呼称の妥当性も含めて一意見を出し合い、そうして1877年の開学以来、百四十年を超えたこの大学の歴史の中で形成されてきた資産というものを見直してゆこうとしているのです。

第一回研究会は、「東大仏教学への新たな視座」と題しまして、近代仏教学の成立というところから始めました。百四十年の歴史の中で形成されてき

た学問そのものが我々の持っている学術資産であり，そこに立ち返って改めて見直す必要があるからです．第二回研究会は，「学術資産としての東京大学百年史とその編纂過程で確認された史料」というテーマで行いました．東京大学は約四十年前に『東京大学百年史』を刊行しております．この研究会では，その百年史編集室にいらっしゃった照沼康孝（元文部科学省主任教科書調査官）先生をお招きして、『東京大学百年史』がいかなる学術資産なのか，その編纂過程で学内からいかなる史料，つまり資産が発見されたか，という視角から議論を深めました．

この第三回研究会では，文化資源学の立場から東京大学の学術資産について掘り下げてゆこうと思います．文化資源学研究室の木下直之先生にご相談したところ，東京大学キャンパス計画室編『東京大学本郷キャンパス—140年の歴史をたどる—』（以下、『東京大学本郷キャンパス』）が出版された機会を捉えて建築を中心に扱うのがよい，というご提案をいただきました．そこで同書の執筆の中心メンバーでいらっしゃる西村幸夫先生，藤井恵介先生，角田真弓先生，そして木下先生にご講演をお願いすることにいたしました．

さて，お手元のチラシの写真¹（図1）がどこか，おわかりになるでしょうか．東大正門から工科大学方面を撮影したもので，右端に写っている道が



図1 「工科大学・理科大学動物学及地質学教室・法文科大学正面・図書館」
小川 [1900] 所収，所蔵・画像提供：東京大学附属図書館

1 当日のチラシには，図1左側の「工科大学」「理科大学動物学及地質学教室」のみが掲載されていた．

今の正門前イチョウ並木の左側にあたります。これは関東大震災前の東京帝国大学を知る人には一目瞭然だったはずですが、今の学生さんにはおそらく説明が必要になってしまっているでしょう。キャンパスが持つ、それ自体一つの資産としての意味とは何か。そして現存する建築物については、それが現存したことの意味は何か。現在の形は、どのような思想や計画にもとづいているのか。我々はこれほどの学術資産の上で暮らしており、日々そういうものに接しながら、このような問いについて見過ごしてしまっているのではないのでしょうか。ご講演される先生方には、この機会にご教示を賜りたいと考えています。ご講演の後に、登壇者全員で座談会を行います。

それでは、西村先生にご講演をお願いいたしたいと思います。